

No. 7

事業名	かぬまっ子わくわくキャンプ ～「交流カレッジ」事業～
事業の特徴	大学との協定締結による自然体験活動のリーダー養成とその活用（近隣の教育学部系の大学との「交流カレッジ」事業の協定締結による大学生のリーダー養成と学生派遣）

実施機関名	鹿沼市自然体験交流センター
連絡先	〒321-1111 栃木県鹿沼市板荷6130 TEL 0289-64-8760 FAX 0289-64-8886 URL http://www.city.kanuma.tochigi.jp/Kyouiku_a/shizen/index.htm
事業規模	市区町村
事業主体	社会教育施設
事業のテーマ分野	自然体験活動、若者のボランティアリーダー養成

1 事業の概要

鹿沼市自然体験交流センターの主な主催事業は「森の教室」（年3回、親子対象、1泊2日）と「かぬまっ子わくわくキャンプ」（夏休みに実施、子ども対象、5泊6日）の二つに分けられる。県内の教育学部を有する大学はもとより、県外の大学と「交流カレッジ」事業実施の協定を締結し、「森の教室」の実施に当たり大学へ学生ボランティアの派遣を要請し、児童生徒への対応や、親との交流を始め、職員の活動補助や活動プログラムの一部の自主企画・運営等を行っている。

また、市から「かぬまっ子わくわくキャンプ」実行委員会への委託を受け「交流カレッジ」事業を実施している。具体的な事業内容は協定締結大学（宇都宮大学、白鷗大学、文教大学）や他大学の学生を実行委員会委員として組織することにより、夏休み中、市内小学4年生から中学2年生までを、30名程度募集し、子どもの協調性・自主性・社会性を養うことを目的に5泊6日の宿泊体験事業を実施している。その活動プログラムにおいて学生が交流センター指導主事とともに事業の企画運営に関わるようになっている。



森の教室



かぬまっ子わくわくキャンプ

2 事業の趣旨、目的

現在の子どもたちは、異年齢集団で遊んだり活動したりする経験が少ない。また、自然体験や物づくりの体験が乏しい。これらの理由から、市内の小学4年生から中学2年生を対象に5泊6日で寝食を共にし、自然体験や物づくり体験を通し、協調性・自主性・社会性を養うことを目的に平成19年8月から本事業を企画した。

当初、生涯学習課が育成している高校生を中心としたボランティアサークルを実行委員とし企画運営に参画させたが、参加児童生徒への対応は不十分であった。

本市は10万都市であるが、大学の高等教育機関が無く、大学の機能誘致が市の特定課題ともなっていた。そこで、市外の教育学部系の大学を中心に「交流カレッジ」事業の協定を締結し、各種主催事業の中で、学生に子どもたちへの支援を要請するとともに、交流センター指導主事の児童生徒への指導方法などを学生が直接学ぶことを通し、学生自身の教員養成のスキルアップにつなげた。

そのような取組みの中で「かぬまっ子わくわくキャンプ」では、20年度から学生を実行委員とし、全日程で参加児童生徒と宿泊、活動を共にし、プログラムの一部を自主運営させることにより、児童生徒の理解をはじめ、各大学の学生同士の連携を通し、より充実した児童生徒への活動提供の機会として現在に至っている。

3 事業の内容

(1) 学習の内容

①自然体験・物づくり活動

川下りや沢登りや暗闇体験のナイトハイクなど、普段体験できない活動を組み入れることにより、児童生徒の危険回避能力を高めた。また、魚つかみやその魚を自らさばくことにより、生命や食への畏敬の念を深めることとした。さらに、活動中の食事に使用する箸を、ナイフを使って



子どもたちからのプレゼント

作ったり、杉板を焼いて写真立てを作ったり、お世話になった大学生に最終日にプレゼントをすることにより、物の大切さと感謝の気持ちを育てることにつながった。

②協調性・自主性を養う活動

野外炊飯やテント設営では各班のメンバーが学生の指導のもと役割分担を話し合い活動に取り組んだ。初日の仲間作りゲームを通し、班の仲間同士や担当する学生との交流を深めた。さらに、話し合いの結果を生かし、野外炊飯では、各自の役割分担が明確化されることにより、子どもたちの協調性や自主性を育む活動となった。

また、テントを班ごとに設営し学生もテントで宿泊することで、学生と子どもたちとの絆がより一層深まるとともに、学生自身も自主的に子どもたちと関わり、子どもとの関係性の持ち方のスキルが向上した。



みんなで食べた手作りピザ

③社会性を養う活動

地元の子どもたちや老人会と交流を図り、川をせきとめ、マスつかみを実施。捕まえたマスは、地元老人会の皆さんの指導で魚をさばき、塩焼きにして食べた。学生の自主企画として泥んこ遊びを企画し、ドッジボールや泥んこ相撲などを実施した。当日の運営や準備を学生が実施し、地元の皆さんの好評を得た。これらの交流を通し、多くの皆さんに支えられて事業が成立していることを理解できるようにした。



学生企画の泥遊び

(2) 学習成果を活用したボランティア活動等の内容及び推進の方法

平成19年度から、「かぬまっ子わくわくキャンプ」事業は鹿沼市からの委託事業として実行委員会が実施団体として実施している。20年度からは、実行委員会を「交流カレッジ」事業締結大学の学生を中心に組織した。21年度は実行委員長をはじめすべてを学生で組織し、担当指導主事



3日目の夜の活動
学生の自主企画によるレクゲーム大会



5日間活動を共にした子どもたちに
学生が一人一人、手作り賞状を渡す

が事務局を務めた。各大学の教育学専攻で学習したことを実践化する場として本事業を活用するとともに、交流センター指導主事の子どもへの対応等を学ぶことにより、学生の指導力などのスキルアップにつなげている。さらに、実行委員長を中心に、各学生が主体となり、5日間の子どもへの支援だけでなく、班活動における係り決めや、泥んこ遊びの企画など、学生ボランティア一人一人が、互いに協議して、各活動や子どもたちへの関わり方や自主企画での役割分担を通し、本事業に主体的に参画できるようにした。

(3) 推進体制等の仕組み

「交流カレッジ」事業締結の各大学では、交流センターの各種事業（親子対象「森の教室」年3回や「かぬまっ子わくわくキャンプ」他）に学生を派遣している。各大学には、各種事業を案内する窓口（学生支援センター・キャリア支援課等）で対応してもらい、学生への参加呼び掛けを行っている。また、交流センター指導主事が各事業のボランティア募集を大学で学生に直接プレゼンすることもある。

各種事業実施後に参加者及び学生にアンケート調査を実施し、次の活動に反映させている。さらに、今回の「かぬまっ子わくわくキャンプ」においては、指導主事が各学生の児童生徒への関わり方を見取り、夜のミーティングの際に学生にアドバイスをを行った。学生にとっても子どもへの関わり方の方向性が明確になり参考になったとの感想を得ている。また、見取りをもとに、協力大学へ報告書を提出し、学生の活動状況や内容などを理解してもらえるようにした。

4 成果と今後の取組

成果

過去に本事業に参加している学生は、子どもたちの扱いのみならず、全体を見通した支援ができるようになった。さらに、学生間の協議の取りまとめやセンター職員との調整もできるようになり、成長の後が見られた。5日間の活動を通し、学生の教員志望の意欲や子どもへの支援の難しさや大切さなどを自ら学習することができたと思う。

今後の取組

大学が学生を交流センターの主催事業へ派遣するだけでなく、今後は、学生が事業に関わった成果をセンター指導主事が見取り、大学へ提供することにより単位の一部として認定できるよう大学側と協議を進めていく。さらに、夏休み中の一般団体の受け入れの際に学生が各種活動の指導に当たるなどのインターンシップ制度もその単位認定も含めて、協議の上検討していきたい。

【執筆者の職・氏名】 鹿沼市教育委員会事務局 鹿沼市自然体験交流センター
指導主事 野原 裕